

## L. アンドリアンと小説『認識の園』

岡 光 一 浩

### I.

1895年春、ベルリートのS. フィッシャー出版社から一冊の小さな本が出版された。「『認識の園』レオポルト・アンドリアン作」(Der Garten der Erkenntnis. Von Leopold Andrian)とその表紙には書かれていた。著者レオポルト・アンドリアン(1875-1951)——彼は本名をレオポルト・フォン・アンドリアン・ツー・ヴェルブルク男爵(Feiherr Leopold von Andrian zu Werburg)といったが、彼自身、つねに自分の作品に、レオポルト・アンドリアンとだけ記しているので、作家である彼について語ろうとする私たちも、彼のことをレオポルト・アンドリアンとだけ呼ぶことにする——は著名なドイツ系ユダヤ人作曲家ジャコモ・マイアーベアー(Giacomo Meyerbeer)の孫にあたる、ちょうど20歳になろうとする若者であった。また小説『認識の園』はその成立時には、『青春の祝祭』(Das Fest der Jugend)という表題をもっていたが、すでに仲間付き合いをしていた当時の文学の指導者たち、ヘルマン・バール(Hermann Bahr)やホーフマンスタール(Hugo von Hofmannsthal)らの計らいで、出版時には、『認識の園』という表題をつけられていたのである。この小説は彼の唯一の小説であったが、作品そのものはごく短いものであった。そしてまた、この小説以外には、レオポルト・アンドリアンにおいて文学的といえるものは、この本に含まれている、前年、シュテファン・ゲオルゲの主宰する雑誌『芸術草紙』(Blätter für die Kunst)に初めて公表されたわずかな詩だけであった。これらの詩と、この本と同名の小説が、この作者のすべての文学的著作であり、すなわち、彼の文学的生涯は20歳で終わったことになる。1893年秋以来、レオポルト・アンドリアンと親しくしていたホーフマンスタールは、1902年、シュテファン・ゲオルゲにあてた手紙のなかで、アンドリアンのこの突然の文学的中断について、悲嘆の気持ちから、次のように書いている。「彼が文学から遠ざかったとはなんたる謎でしょう。彼の視線はなんの感動もなく、彼自身が数年前唯一生きていたものの上を越えて行ってしまったのです」と。

ホーフマンスタールは生涯、青春の友として、アンドリアンのことを理解し

続けたが、この小さな作品についても、それに劣らない評価をした。「ドイツのナルシスの本。ここには、全世代が似たような象徴のうちに現れる素晴らしい瞬間瞬間がある」と彼は書き記している。おそらく、そのとおりだったのだろう。あの厳格なゲオルゲさえも、この本を好み、友人とともに、これをオランダ語に翻訳したのである。そしてさらに彼は、後までも、この本を、そっくりそらんじていたという。「私がどんなにポルディのことを称賛しているか、彼が分かってくれればいいのに。音楽を解さない人間はこの作品に全くなんのかかわりももつことはできないだろう」と彼は言った。しかし、世の中には音楽を解する人がいたのだ。この本は「時代の崇拜書」と崇められ、1895年から1919年まで、たくさんの作家の活躍するなか、なんと4版を重ねたのであった。そして現在、この本は最新刊の1990年版で9版を数える<sup>1)</sup>。

およそ現在、初版が出されて100年になる小説『認識の園』、この世紀末の作品には末期と退廃という当時の時代風潮が如実に言い表されている。ここには1895年という世紀末の時代精神が読み取れるし、当時のモチーフである審美主義や、「女」と「生」というような問題のヴァリエーションも見ることができる。主人公のエルヴィーンは若い王侯であり、生の行為が欠けているために、「生」を「見知らぬ仕事」とみなす。しかしそれは、死へ向かう仕事なのである。この小説の結末に見るように、彼は「別の空気に魅せられて、生から隔てられ」、「生の認識もせず」、死んでしまうのである。彼の母親は言う。「生の秘密を私たちは解明することはできません。なぜなら、生はあまりに豊かであまりに多様で、あまりに無限であるからです」と。このように、彼は生にかすかに触れるだけで、決してその豊かさを捕らえることができず、彼の感受性も潰えてしまうのである。彼の経験は薄っぺらで、世間を知らないままである。

それにもかかわらず、この小説の魅力は私たちをひきつける。まさしく私たちをうんざりさせるほどにめくるめくモチーフの現れてくる夢のように。ナルシスである主人公のエルヴィーンの夢見る夢はそうした夢なのである。ホフマンスタールはこの小説を次のように非常に美しく要約している。「ここには夢のなかにあるような、短い生涯が、オーストリアの土地を舞台に、全く日常的な出来事を通して、非常に地味にも語られているが、たくさんのことが物語られ、かつ漠然とした描き方のため、そこには童話のもつ特性が生まれている。そしてこの特異性は冷たい意図によって生じたのではなく、無意識に、独特な感動する心から生じたものである。」

## II.

I 章は、1990年にチューリッヒのマーネセ出版社から出版されたこの小説の最新刊についての、『フランクフルター・アルゲマイネ新聞』（1990年12月29日付け）に掲載された「ナルシスは夢見る。『認識の園』の100年」という記事<sup>2)</sup>を参考にしたものであるが、こうした評価を目の前にして、私たちはどのように対応すべきであろうか。とくに世紀末の研究を、それもウィーン世紀末の研究をする者にとって。

私たちはこの作家についてどれだけのことを知っているだろうか。おそらく多くの人はその名前さえ知らないのではなかろうか。せいぜい知っている人も、ホーフマンスタールの生涯の友、世紀転換期の「若きウィーン派」(Jung-Wien)の作家のひとりといった程度であろう。事実、この作家についての論文はこれまで日本では皆無である<sup>3)</sup>。しかし、世紀末、ないしは世紀転換期のウィーンをテーマに研究を行う場合、レオポルト・アンドリアンという名前は確かにかなりの割合で目にする名前なのである。近年の翻訳をみても、カール・E・ショースキーの『世紀末ウィーン』<sup>4)</sup>やニーケ・ワーグナーの『世紀末ウィーン精神と性』<sup>5)</sup>もかなりの頁をこの作家のために割いている。勿論、オーストリアやドイツではこれまで、かなりの数の彼についての記事や論文が書かれ、1967年には、まとまった唯一の総合的な研究書として、H. シューマッヒャーの『レオポルト・アンドリアン』が出版されている<sup>6)</sup>。

ではなぜ、L. アンドリアンが注目すべき作家なのであろうか。それは先にも述べたように、この作家の代表的な小説『認識の園』が時代の一般的感情を先取りしているからであり、また、この小説の与えた若者達への影響の大きさのためであろう。この小説が現れた19世紀末、若い知識人たちはこの小説に感激し、「崇拜書」(Kultbuch)とまで持ち上げたのである。特にホーフマンスタールには、この小説に対する絶賛の言葉がたくさんある。この小説を「同時代の人々の全世代に影響を及ぼした世界文学のひとつである」<sup>7)</sup>とまで言っているのもホーフマンスタールである。またシュテファン・ゲオルゲはアンドリアンに対していつも冷ややかであったが、それに反し、驚くことに、この小説に対する彼の評価は熱狂的である。彼はオランダの作家と組んで、この小説をオランダ語に翻訳するととどまらず、アンドリアンに捧げる詩まで書いている。『生の絨毯』(Der Teppich des Lebens)のなかの『盟友たちに』(Den Brüdern)という詩と、『第七輪』(Das Siebente Ring)のなかの四行詩『エルヴィーンの影』(Erwins Schatten)がそれである。また影響を受けた作品としては、明らかに

ホーフマンスタールの短編小説『第672夜の物語』(Das Märchen der 672. Nacht)や断片小説『アンドレーアス』(Andreas),そしてローベルト・ムージル(Robert Musil)の『候補生テルレスの惑い』(Die Verwirrungen des Zöglings Törleß)などが挙げらる。そしてまた、この小さな小説が、1895年の初版から1919年の間に4版を重ねたという事実、これも当時のこの小説に対する評価を示すものである。小説『認識の園』は世紀転換期の最も重要な文学作品のひとつに数えられていたのである。

しかし今、そうした熱狂的な評価にいくら力を入れてみても、その実態は相変わらず不明なままであり、それほど意味があるとも思えない。それ故ここではまず、わずかな作品しか残さず、その創作の時期も極めて短期間であったにもかかわらず、当時の文学界で注目される作品を残した作家レオポルト・アンドリアンという人物について、そしてその代表的な小説『認識の園』について紹介し、この小説がどれだけ当時の若者達に受け入れられ、それが当時をどれだけ反映しているものであるかを、いわゆるこの小説の意味について述べ、併せて当時の文学的、精神的風土を明らかにしてみたい。まず最初に作家と作品についての詳しい紹介をするが、我が国ではほとんど知られていない作家であるので、こうした論の進め方もひとつの意味のあることと思う。つまり、拙稿はレオポルト・アンドリアン研究の道を拓く基礎作業というべき研究序説である。

### Ⅲ.

まずこの章では、作家レオポルト・アンドリアンについて簡単な経歴を、先に紹介した彼についての唯一の総合的研究書であるH.シューマッヒャーの『レオポルト・アンドリアン』を中心に、いろいろ手元にある研究書や雑誌論文、新聞記事、そして文学事典などを手掛かりにまとめることにする。なお、煩雑を避けるため、以下、レオポルト・アンドリアンのことをアンドリアンとだけ記すことがある。

レオポルト・アンドリアンの作家としての生涯は輝かしいが、短いものであった。1875年5月9日、彼はベルリンに、父フェルディナント(Ferdinand)と母ツェツィーリエ(Cäcilie)の第2子として生まれた。しかしこの、ベルリンで生まれたことを、アンドリアンはことのほか嫌い、古いオーストリア貴族の出という素性から、自分の故郷がプロイセンの首都でなく、ハプスブルク帝国の首都ウィーンであることを再三強調している。事実、彼が成長したのは

ウィーンにおいてであったが、それにもまして自分の資質がウィーン的であることを訴えたかったのであろう。彼の家族はウィーンで暮らしたが、旅に出ることも多かった。アンドリアンも少年時代、裕福な両親に連れられ、いろんな所で過ごしている。冬や春にはフランスのニースで、夏や秋にはザルツカンマーグートの保養地アルト＝アウスゼーで過ごした。この湖のほとりに、アンドリアン家は素敵な別荘をもっていたのである。またここには彼の父の功績を讃え、今日でもアンドリアン・ヴェルブルク遊歩道(Andrian-Werburg Promenade)があるそうである。父フェルディナントは地質学、民族学、人類学の有名な学者であり、ウィーン人類学協会の創設者でもあった。また母ツェツィーリエはよく知られたドイツ系ユダヤ人作曲家ジャコモ・マイアーベーアの娘であった。このような優秀なふたつの遺伝的素質から、非常に芸術的で、繊細なレオポルト・アンドリアンという素質が生れたのであった。

1885年、アンドリアンは古いオーストリア貴族の師弟の教育機関であり、エリートの集まるウィーンのカルクスブルク・イエズス会神学校 (Jesuitenstift Kalksburg)に入学する。この学校は『認識の園』のなかで、主人公エルヴィーンの入る寄宿神学校のモデルでもある。ここで教育はアンドリアンに決定的な影響を与えるが、また1888年のメラーンで彼の家庭教師を務め、また後にウィーンでも家庭教師を務めた、当時まだ新進の若い文学史家であったオスカー・ヴァルツェル(Oskar Walzel)の影響も彼にとって大きかった。その最初の成果が、この年のクリスマスに愛する母に贈られた、彼の最初の詩集である物語詩集(Romanzenyclus)『ハンニバル』(Hannibal)である。これはヴェネチアで印刷された、いわゆるエピゴーネン風の叙情詩であった。

1890年、アンドリアンは有名なウィーンのショッテン司祭の修道院ギムナージウム(Klostergymnasium der Schottenpriester)に入学し、1894年、マトウーラ(大学入学資格試験)に合格する。そして引き続きウィーン大学で法学の勉強をする。ショッテン・ギムナージウムに通学中の1893年秋、彼は一歳年長のホーフマンスタールと知り合うが、これはアンドリアンにとって大きな意味をもった。生涯にわたるこの友情は、アンドリアンの文学の道を輝かしいものにするきっかけでもあった。かってこのギムナージウムのあった、ウィーン1区のフライウング(Freyung)にあるショッテン教会 (Schottenkirche)横の、ショッテン稜堡(Schottenbastei)に入る門のそばの壁には、今も、アンドリアンが1890年から1893年までこのギムナージウムの生徒であったことを示す大きな記念銘板がはめ込まれている<sup>8)</sup>。

ウィーン大学では、彼は法学のほかに、歴史学、哲学、ならびにドイツ語学文学を学び、1899年には法学博士の学位を授与された。大学に在籍中、彼は1894年、シュテファン・ゲオルゲの雑誌『芸術草紙』に初めて詩を発表し、ゲオルゲとも会うことができている。この雑誌への投稿は1901年まで続くが、またホーフマンスタールの導きにより、彼は当時の指導的な文学グループ「若きウィーン派」の拠点であったカフェ・グリーンシュタイドル(Café Griensteidl)にも出入りし、リヒャルト・ベア＝ホフマン(Richard Beer-Hofmann)、アルトゥール・シュニッツラー(Arthur Schnitzler)、フェーリックス・ザルテン(Felix Salten)、ヘルマン・バルらと親しい交際を始めるのであった。この文学グループの批評的指導者であるH.バルはアンドリアンの叙情的な詩に将来、詩人としての輝かしい道が待ち受けていることを予言した。そしてその後の1895年には、小説『認識の園』が発表される。アンドリアンはまだ20歳にもなっていなかった。仲間の作家たちはこの小説を読んで、彼を神童ともてはやしたのであった。しかし、この作品の好評にもかかわらず、彼はその後、芸術的には全く沈黙してしまうのである。これは神経症気味な精神的危機によるところが大きいと言われている。1897年には、彼はバーデン・バーデンに療養のために滞在する。しかし或いは、この危機は、後にホーフマンスタールが『チャンドス卿の手紙』(Der Brief des Lord Chandos, 1901)のなかで示したような運命だったかもしれない。ホーフマンスタールがチャンドスの運命を乗り越え、より社会的なものに作風を転換し、作家としての発展をみせたのに反し、アンドリアンは1899年以降、作家としての創作力を全くなくし、文学の道を捨て、外交官の仕事に入っていくのであった。

外交の職務に就いたアンドリアンは、1900年から1918年まで、アテネ、リオ・デ・ジャネイロ、ブエノスアイレス、聖ペテルスブルク、ブカレスト、そしてワルシャワと渡り歩き、ヨーロッパの国々や南アフリカの大使館で働く。アテネでは代理公使、ワルシャワでは大使館参事や総領事、そして総督、公使にまでのぼりつめるのである。しかし、1918年7月のオーストリア・ハンガリー帝国崩壊前には、この度もホーフマンスタールの仲介によって、彼はウィーン・ブルク劇場の支配人(Intendant)に就任し、官吏の仕事から身を退き、故郷に帰って来るのである。沈みゆく帝国に変わらぬ愛着をもち続け、つねに自分の理想を保とうとしたハプスブルク帝国の正統主義者であったアンドリアンにとって、帝国の崩壊後も、官吏の仕事が続けることは大変な苦痛だったのであろう。失意に底にあった彼は、ウィーンの劇場支配人の仕事も数カ月務めたのち、今

度は完全に職業生活から退き、アルト＝アウスゼーに隠遁し、私的な生活に入っていくのである。

そして1919年には、彼はリヒテンシュタインの市民権を得るが、1938年頃までは、この国のシェーン、オーストリアのアルト＝アウスゼー、フランスのニース、スイスのフライブルクなどを転々として暮らし、多くの文芸批評家とか、哲学者、出版者らと出会い、友情のこもった交際をするのであった。また帝国崩壊後、彼は、君主主義ならびにトマス主義の立場から、政治的・宗教的問題への傾向をみせ、ハプスブルク帝国の正統主義者としての理論的な著作を生みだした。1930年の『宇宙の身分制度。あるカトリック作家の合理的世界像』(Die Ständeordnung des Alls. Rationales Weltbild eines katholischen Dichters)と、1937年の『理念というプリズムおけるオーストリア。指導者たちの問答書』(Österreich im Prisma der Idee. Katechismus der Führenden)である。しかし1938年、ナチス・ドイツに、オーストリアが併合され、第二次世界大戦が勃発すると、ユダヤ系であった彼はフランス、ポルトガルを経て、ブラジルへ亡命し、リオ・デ・ジャネイロに逃れた。そして戦後の1946年、ヨーロッパに再び帰還するが、その年、妻を亡くし、また1951年には再婚するが、その年の11月19日には彼自身、スイスのフライブルクで死亡する。享年76歳であった。

#### IV.

この章では小説『認識の園』の粗筋について紹介しよう。しかし、粗筋によって、作品の内容を伝えるのがひどく困難な作品でもある。古典的とも言っている、素朴な年代記的な描き方がされ、この小説は「圧縮された教養小説」<sup>9)</sup>であるという記述もあるが、その内容にはいわゆる伝統的な教養小説にみられるような行為というもの全く存在しない。ほんのわずかな体験に対して感じられた内面が抽象的な思いとして描かれるにすぎないのである。しかし、なによりもここでは、当時の若者の内面を具体的に見ておかねばなるまい。そのためには少々困難であろうと、粗筋を見ていくことがまず考えられる最善であろう。作者レオポルト・アンドリアンがつねに主人公のことを「彼」ではなく、「der Erwin」と書き記していること、——このことも作者の主人公に対する姿勢や、そしてこの作品に対する取り組み方を示すものでもあろうが、まずは難解な筋を追っていくことにする<sup>10)</sup>。

ドイツに領土を隣接するオーストリアのある王侯の息子エルヴィーン(Erwin)は、父の死後、12歳近くまで母のもとで育てられた。その後、彼はウィー

ンのカトリック系の寄宿神学校に入れられ、母のもとを離れた。そこで彼は人との付き合いもなく孤独であったが、心は満たされていた。というのも彼は「肉体と魂が謎めいたふうに互いに入り混じった、ほとんど両者が重なり合った生を生きて」(8)いたからであった。つまり、外の世界の出来事は彼にとって、「彼の内面から湧き出たひとつの言葉の表現」にすぎなく、彼の意志を通して初めて、それは「意味や位置や色彩」を得るものだったのである。このように彼は自分の内面世界に生き、寄宿神学校で仲間たちの干渉のなかにあっても、それを「横暴」と考え、彼らを「危険をはらんだ敵」として退けることができたのである。

しかし、しだいに彼は仲間たちのなかの自分を意識し始め、彼らの言葉に注意を向けるようになった。すると彼はその言葉や彼ら自身に完全に混乱させられてしまい、自分がどうして彼らの言葉に注意を向けるようになったのかまで理解ができなくなってしまうのであった。そんな折、彼の心をいやしてくれるのは母への思いであった。ともかく彼は生を、「しなければならぬひとつの見知らぬ仕事」として受け入れた。しかし、それは彼を疲れさせ、眠ることが彼の唯一の安らぎとなったのである。

しばらくするとエルヴィーンは、寄宿神学校のなかで安らぎに似た憧れを感じるようになった。そして、この安らぎが「神においてのみ存在する」ことを認識した彼は、牧師になることを決心するのであった。そうすると今や、彼の生はたやすいものとなった。彼は教会の生にかかわることだけを生の予感として感じ、それを素晴らしいものと考えた。しかし一方すぐにも、彼は別の素晴らしいにも魅かれるのであった。例えば、田舎の秋の城、香の焚かれた町の部屋、銀色の紋章をつけた馬車や馬具、そして馬などの、世の中の生の素晴らしいに。そんなわけで彼は、これからの自分の人生は世の中に対する教会の闘いになるだろうと考えた。そのような気持ちから、彼は牧師の勉強に出発する前、「ウィーンで軟弱な喜びを楽しんで過ごす」のであった。この頃彼にはラトーという友人もいたが、一方また、彼は「敵」たちによって雪山で襲われるという事件もあった。このため彼は肺炎に罹ってしまうが、この事件によって彼は、これまで敵と思っていた寄宿神学校の仲間たちを、「よい仲間たちで、決して実際は敵ではないことに気付く」のであった。元気になると、エルヴィーンは牧師の勉強のために、ひとりの牧師と一緒に、南チロルの山間の地ボーツェン(Bozen)に向けて旅立つ。そして汽車の旅の途次、彼は、窓の外の人々の生活ぶりを見、また途中で乗り込んで来た肺結核に罹っている陸軍少尉に接し、牧

師になろうとする自分の将来に、一種の迷いのようなものを感じるのであった。

3年間の予定で、彼はポーツェンで牧師になるための勉強をする。最初のころ、ウィーンの寄宿神学校での、当時彼の軽蔑していた生が思い出され、彼の心を誘惑し、彼は寄宿神学校に帰りたいという憧れをもつようになるが、日々が経過するうち、ポーツェンでのことも彼は好んで受け入れるようになっていく。彼は、ポーツェンの緑の教会の塔、鐘の響き、果樹の花咲く春を好み、とりわけ、劇場に登場したひとりの女性歌手に夢中になった。この歌手は現実に対して豊富な経験をもち、舞台ではそれを演技として聴衆の前にさらけ出し、人気を博していたのであった。エルヴィーンには最初の休暇後、友人ができた。ウィーンから来たハインリッヒ・フィリップという少年であり、善良で丁重で愛すべき人物だった。エルヴィーンはこのフィリップ少年から、これまで知らなかった言葉や理解できなかった言葉の意味を教わるのだった。「この世に一連の秘密があること、それも彼に明らかなことのように思われることにも秘密があること、そしてこの世には、悪くて禁じられていることと同時に、心を引く魅力的な事柄も存在すること」(17)を彼は教わったのである。そして彼は、ウィーンの様々なものが、これまで自分に禁じられていた世界と、つながっているのではないかと漠然と感じるのであった。

こうしてポーツェンでの様々な体験がエルヴィーンを、将来、牧師になるということとは違った欲求や期待に変えていくようになる。彼は強く望んでいた静かな生活を否定し、世の中に存在する素晴らしいものを楽しみたいという気持ちをもつようになる。そしてウィーンの「オペラ舞踏会、ソフィ柱、ロナヒャー劇場、音楽堂、サーカス、フィアカー」に満足を見つけたことができるだろうと考えるのであった。もはや学問や生き方について教えてくれた年老いた牧師との散歩以外にはなにも、ポーツェンには彼を喜ばすものはなく、ここにきて3年目、ウィーンへの思いは彼にとって待ち切れぬものとなった。

ポーツェンで3年間を過ごし、エルヴィーンは17歳でウィーンに帰って来た。最初に彼の出掛けていったのはあの寄宿神学校の仲間たちのところだった。しかし彼は次第に、彼らから離れ、ウィーンの様々なものに魅かれていった。モニュメントの碑文、馬のスペイン風の歩み、近衛兵の制服、騒々しく華やかな音楽の吹き抜ける王宮庭園、色とりどりの布の並んでいる店のショーウィンドウ、フィアカー、そして友人たちの高度で投げやりな生活などが彼の気に入った。しかし彼の最も気に入ったことは友人たちがウィーン子だということに誇りをもって楽しんでいることだった。そして彼もウィーンの差し出す楽しみ

感情に陶醉するのだった。自分の世界が、これまで禁じられていたこれらの世界とひとつになり、彼の中で膨らんでいくように彼は感じた。特にフィアカーに乗っているとき、彼はおののくような興奮を覚えるのだった。ウィーンに帰って来て2年目、彼は仲間からフィアカーに乗って、ホイリゲに行こうという誘いを受けた。しかしフィアカーに乗ってみても、彼はもう期待したものをみつけることができなかつたし、彼らに対しても、エルヴィーンは自分の求めたものでなかつたという思いにしばしばかられるのだった。そして世の中もまた、彼には魅力のあるものではなくなつてしまつた。

クリスマスの少し前、彼はそれまであまり親しくなかつた素朴で天真爛漫な少年クレメンスと親しくなつた。あるとき、ふたりは一緒にプラターやホイリゲに行き、そこで軍楽隊の音楽に耳を傾けるのであつた。その時彼らは「その永遠に変わりばえしない、甘さと粗野さをもつた下手なワルツの音楽」に心を捕らえられ、「媚びいるような、おぼろげな幸福の感情」に包まれるのであつた。これは「自己愛、相互愛、これまで愛したもののすべてへの愛」であり、「祖国愛」を意味するものであつた。春になると、彼はいつもひとりで、シェンブルンやラクセンブルク、フォルクスガルテンに行き、ブルージェの弱々しい詩句を口ずさみ、その響きが彼の心を動かすのであつた。「このブルージェの弱々しい詩句にはいつもふたつの言葉が現われ、いつも、かつては彼が別々に求めた、あらゆる高貴さとあらゆる下劣さの期待が今やひとつになつて存在する戦慄を与えたのであつた。それは〈女〉と〈生〉という言葉だつた。」(26)。6月のマトゥーラ(大学入学資格試験)の直前、ラトーが死に、エルヴィーンは葬儀に出掛けていった。しかし、彼は不思議なほど冷静だつた。マトゥーラの後、彼はクレメンスと一緒に田舎に、3日間の旅をした。別れるとき、彼はクレメンスから、これまでなにも得ようとせず、無為に過ごしてきたことを悔やんだ。そしてそれとともに、彼にはこれまでの人生の多くのことが思い出されてくるのであつた。クレメンスとの観劇の夜のこと、家庭教師とのシェンブルンの散歩のこと、早起きした懺悔の日の朝のこと、ギムナージウム通学中に通つた通りや中庭、皇帝のリトグラフのことなどが彼の心をかすめていった。そして彼はこれらの「思い出」(Erinnerung)こそ、自分の生であると考えてるのであつた。しかしながら、これらの「思い出」のなかに彼は戦慄も感じなかつたし、詩人の生についての言葉も認めることはできなかつた。つまり「苦痛と歓呼、崇高さと下劣さ、天国と地獄を……ひとつにするものの全体的充満」を彼は「思い出」のなかにも見いだすことはできなかつたのである。そこで彼は、

女によって自分のうえにひとつの啓示が開かれ、その啓示が生を素晴らしいものにし、生を明るいものにするだろうと信じた。そしてその啓示がいつかやって来るだろうと期待した。

しかしウィーンに帰るとまた、様々なものに彼は悩まされた。彼にはウィーンに属しているあらゆるものが重要だと感じられたからである。ウィーンのいろいろな教会、聖人像、宮殿や家々、庭園、町に流れるいろいろな音楽、そして将校、近衛兵やいろいろな人々、それらすべては彼にとっては意味をもつものとなった。彼には人間への大きな好奇心が生まれて来たのである。

このような豊かな時にも、しかし荒涼とした別の時がやって来た。あるときシェーンブルンで、こうした荒涼とした気持ちが特別強く彼を襲って来たのであった。「事物が彼の前に現れても、何も語りかけてこず、ふだんの考えまでも彼から滑り落ちてばらばらになり、彼をひとり取り残してしまうのであった。」(33)。また日頃親しく話をしているクレメンスに対しても、あるとき「ふたりの会話は無残なものになった。会話はふたりとはかかわりなく先に進み、同時にふたりの考えは別々の道を取り、そしてその言葉はふたりが話したのとは違ったように響いたのであった。」(34)。1年後、彼は「生の凱旋柱」のようなある女と暮らし、彼女に生の啓示を期待した。しかしそこにも彼は啓示を見いだすことができなかった。

5月の夕のあるとき、彼はたくさんの体験への憧れを感じた。輝くような夏服の娘たちのいる狭い路地を歩き、植物が香りを放ついくつもの庭を通り、郊外にやってきた。そして、彼は歌と音楽の聞こえてくるみすばらしい建物のなかに入ってしまった。そこにはたくさんの人がいて空気も息苦しく、人々の前では若い瘦せた化粧した男と、肩を露わにした女が歌を歌っていた。しばらくするとその歌は彼らの間を流れ、彼らはうっとりして、それに身を任せるようになった。ただエルヴィーンのそばに腰掛けていたひとりの「よそ者」(der Fremde)だけはこの雰囲気にも打ち解けぬようだった。しかし、エルヴィーンがワインや紙巻きタバコを差し出すと、この男は親しげで「珍しく媚びるような恭しい感謝の念」を見せるのだった。その男はエルヴィーンに、「その金色の兜のような髪の下に死の荒涼とした高慢な美しさをみせた」あのラトーと対立するものを思い出させるような、「生」であった。この「よそ者」の顔には、「柔和さと悪意、不安と脅しと、完全なる生があり、しかし同時に、それは生そのものにおける」(37)ようだった。

エルヴィーンは20歳になったが、彼の心には自分がまだ生の神秘を解明して

いないという思いが重くのしかかっていた。彼はさらに深く、さらに細心に自分の過去に身を任せていった。これまで自分は生の神秘を、間違ったところに見つけようとしたのだという思いが大きかったのである。その思いから、彼にとっては様々な「思い出」が高い価値をもつようになった。「思い出はかつては感動的なものであったが、今やそれらは彼にとって崇高で貴重なものとなった。思い出こそが確かに彼の唯一の遺産であり、自分の生であり、そしてこの生が美の源泉だった。」しかしそれにもかかわらず、彼は話すことはなかったけれども、出会うたくさんの人々の唇や髪に心を捕らえられ、生を祝祭のように感じるのだった。夏、高い山に登った時の放牧地での夜の経験もあった。夜の「ゆっくりと波打ち、形のない線の美しさに溢れるように山頂に向かっていく」草地、その上に広がる青く、宝石のように震えている星のある平たい空、それらの間に屹立する三日月、そしてそよ風などに触れた喜びこそが人間のもつ心からの衝動であるとも彼は思うのであった。しかし、朝になるとその思いもなくなってしまうのであった。そして、この夜の「思い出」はエルヴィーンにとって次第に、不快なものになっていった。

9月タウィーンで、彼はまた、あの「よそ者」に出会った。この男は以前と同じように、エルヴィーンにとっては謎めいていたけれども、以前よりもみずぼらしく、おどおどしているふうであり、最初にこの男に話しかけたときの「期待に満ちた好奇心」は、彼においてはもはや奇妙な不安と混ざり合ったものになっていた。そして彼には生についての次のような思いが浮かんでくるのであった。「孤独な生にもかかわらず、なにが人間を結び付けるのか。誘惑し威嚇する、この生の秘密はどこにあるのか。自分にはどのような力が影響を及ぼすのか。自分にはどうしてその力が認識できないのか。」(45)。こうした思いのなかで、エルヴィーンにはウィーンの町は違って見えるようになってきた。かつて彼の心を躍らせたこの町の様々なものは今や、彼を混乱させる彼の脅威となってしまった。そして彼は音楽や人々の目を恐れた。

しかしこの不安は、訪ねることになっている母への憧れによって弱いものになっていった。母に会い、エルヴィーンは母の愛を知り、「自分はひとりではなく、彼女と一体である」ことを感じた。母もまた彼に会うことを熱望していた。父の死後、母は多くのものを見つめ、それらを愛してきた。しかし今や、彼女の心は息子へと戻っていったのである。「彼らは本当にひとつだった。そして彼のなかにあったものは彼女のなかにもあった。しかし彼のなかには、生の卑賤さ、苦しみ、生の感動によっておののいていたが、彼女のなかにはひとつの

芸術作品のようだった。」(48)。ある夕、ふたりはイタリアの風景の柔らかい祝祭的な優美さのなかを歩いていた。彼女は次のように言った。「生の秘密を私たちは解明することはできません。なぜなら、生はあまりに豊かでありあまりに多様で、あまりに無限であるからです」(49f)。それに対して、彼は「もし生があなたのおっしゃるようであれば、私たちは確かに、生をその豊かさのなかから理解しようという希望をもつでしょう。しかしその唯一の奇蹟は私たちの運命なのです。……そして、その生の根底は魂のなかにあるに違いありません」(50)と言う。しかしそれに答えて、母は「いいえ、私たちは見知らぬ召し使いたちに導かれて、見知らぬいくつもの城の遊歩庭園を歩くように、私たちの生を歩くのです。私たちは彼らが私たちに示した素晴らしい事柄を保持し、愛するのです。しかし、どのような人々のところへ、彼らが私たちを導くのか、そしてどのように早く、彼らが私たちを導いて行くのかは彼らにかかっているのです。最初、それは両親であり、それから他の者が付き従うのです。」(50)。それに対して、さらにエルヴィーンは次のように言う。「いいえ、私は、秘密は魂のなかにあると思うのです。つまり私たちは孤独です。私たちと私たちの生は孤独です。そして私たちの魂は私たちの生を創造するのです。」(50)。そしてふたりは、エルヴィーンの言うことが真実であることを認め合い、互いに心が結び合わされているのを感じるのであった。しかし、だからと言って、ふたりとも生の秘密の解明ができるわけでもなかった。

ふたりは別々の旅を続けた。母は旅の後、元の生活に戻っていったが、エルヴィーンは旅のなかで、いろいろなものを愛した。「彼にとって、生の秘密はあらゆる事柄や新しい本質の上に広がっていた。だが、それらは彼を混乱させはしなかった。それらは彼には親しいものだった。彼はそれらとひとつになっていた。」(51)。そしてさらに、彼は旅に憧れた。それは「ただ新しい事柄や新しい本質に憧れての旅であっただけでなく、また、それらの存在と自分の存在との合一の戯れや、旅の偶然性、苦しみや幻滅を考えての旅となった。」(52)。彼は世界を渡り歩き、その世界の多様性のなかで自分の位置を見いだそうとしたのであった。海に沿って旅をし、彼は様々に変化する海を見、太陽を見た。いろいろな人に会い、彼らと話をした。帰路の11月の初め、ヴェニスで彼は明るく、静かな生をもった兄妹にも出会った。

ウィーンで彼は一年間、いろいろな学問を勉強し、さらに認識への憧れが強まった。そして彼は、「自分自身が世界であり、世界と同じく偉大で唯一なものであることを悟り」、「自分は世界の中に自分の位置を求めてはならない」(54)と

いう思いをはっきりともつのであった。そして彼はさらに勉強を積み、そうした後、その姿から自分の姿も見えてくるだろうと希望した。11月、雨が降り、彼は体験への憧れを感じ、通りを長い間歩き、ずぶ濡れになって家にたどり着いた。そのとき彼はまた、春と夏にも会ったことのあるあの「よそ者」に出会うのであった。この男は以前と違い、痩せこけ、歪み、冷酷な様子をしていた。エルヴィーンにとって今や、この男は彼を魅き付けるものでなく、恐ろしい存在以外のなにもものでもなかった。そしてエルヴィーンは生を意味するこの男がなにもものであったかを理解するのであった。「それは、彼の誕生の時から彼を探し、彼を春の陶酔のなかに見つけだし、それ以来彼を付け回し、彼の後を歩き、ますます彼に近づき、ついには彼に追いついて、彼の体到手をおくかもしれない、彼の敵だった。」(55)。彼は不安になり、魂は残酷なほど荒涼となった。今や、この見知らぬ男との凄惨な戦い以外には考えられない状況にあった。彼は不快で途方にくれるような、死に対する恐怖を感じた。「突然、敵は私たちに襲い掛かってくる。その敵と素手で戦わなければならない。しかし人々は、その両側を抜けて先にどんどん進み、私たちを助けてくれない。私たちの呼吸している空気は彼らのそれと違うのである。彼らは私たちの叫び声が聞こえないし、私たちが敵もみえない。私たちはひとりで敵と戦わなければならない。」(55)。

その3日後、エルヴィーンは病気になった。死に対する恐怖もなくなったが、以前からの認識への憧れが再び現れた。しかし、それは干からびた、苦しい憧れだった。相変わらず彼は生から隔てられていたのである。友人たちが彼を訪ねてきたが、彼らは今や、エルヴィーンにとって価値がなく、彼はなんのかわりも見いだすことができず、かえって彼の中の不毛さは増していった。彼は夢の中にあっても、相変わらず生の認識がやってくることを望んでいた。しかし、ひどい熱のなか、彼は眠り込むこともできなかったが、またなにも認識できず、死んでいった。

(未完)

### 〈注〉

- 1) Horst Schumacher: Leopold Andrian. Werk und Welt eines österreichischen Dichters, Bergland Verlag, Wien, 1967, S. 129. ここでは1964年の第7版までの

指摘があるが、その後の文献から、1970年春に第8版がS.フィッシャーから、1990年にマーネセ出版から第9版というべきものが出版されている。なお現在入手可能なのは最新刊だけであろう。

- 2) Harald Hartung: Narziß träumt. Hundert Jahre im „Garten der Erkenntnis“. (Frankfurter Allgemeine Zeitung, 29. Dezember, 1990)
- 3) わずかに、次のものにはレオポルト・アンドリアンについての長い指摘がある。飯吉光夫『レオポルト・アンドリアンの『認識の園』にふれつつ』(『プリスマ。川村二郎をめぐる変奏』), 小沢書店, 1991, 95-97頁。しかしこれはエッセイの域を出るものではない。
- 4) カール・E・ショースキー『世紀末ウィーン。政治と文化』(安井琢磨訳), 岩波書店, 1983年, 377-387頁。
- 5) ニーケ・ワーグナー『世紀末ウィーンの世界と性』(菊盛英夫訳), 筑摩書房, 1988年, 31-32頁。
- 6) Horst Schumacher: Leopold Andrian. Werk und Welt eines österreichischen Dichters, Bergland Verlag, Wien, 1967. 他の研究については後述の参考文献を見よ。
- 7) Manesse Verlag (Zürich): Presse- und Informationsabteilung, Leopold Andrian „Der Garten der Erkenntnis“. 1990.
- 8) BENEDICTUS CHELIDONIUS UND WOLFGANG SCHMELTZL WIRKTEN ALS DRAMATIKER IM SCHOTTENSTIFT ZWISCHEN 1518 UND 1551. SCHÜLER DES SCHOTTENGYMNASIUMS WAREN DIE DICHTER. EDUARD VON BAUERNFELD 1812-1818, JOHANN NESTROY 1813-1816, FERDINAND KÜRNBERGER 1836-1839, FERDINAND VON SAAR 1843-1848, ROBERT HOMERLING 1844-1846, LEOPOLD VON ANDRIAN 1890-1893 ÖSTERREICHISCHE GESELLSCHAFT FÜR LITERATUR というかなり大きな Gedankentafel が Schottenkloster の紹介として残っている。Peter Ernst: Wiener Literaturgedenkstätten, Edition Wien Verlag, Wien, 1990, S. 10f.
- 9) Manesse Verlag (Zürich): Presse- und Informationsabteilung, Leopold Andrian „Der Garten der Erkenntnis“. 1990.
- 10) テキストとしては、Leopold Andrian: Der Garten der Erkenntnis. Mit einem Nachwort von Iris Paetzke, Manesse Verlag, Zürich, 1990. を使用した。引用の後の括弧内の数字は、このテキスト(S. 5-58)の頁数である。なお、この小説には次のような抄訳がある。レオポルト・アンドリアン『認識の苑』(檜山哲彦訳),(池内紀『ウィーン 聖なる春』, ドイツ世紀末第一巻), 国書刊行会, 1986, 92-99頁。

〈参考文献〉(手元にある主なもののみを、年代順に記す。)

1. Gerhart Baumann: Leopold Andrian: Das Fest der Jugend. (in: G. R. M. 37,

- 1956), S. 145-163.
2. Walter H. Perl: Dichter des Alten Österreich, (in: Die Furche, 31, 4. August, 1962), S. 9f.
  3. Walter H. Perl: Hofmannsthal und Andrian. Spiegelung einer Freundschaft, (in: Die neue Rundschau, 73, 1962), S. 505-529.
  4. Robert Blauhut: Die Welt Anatols, (in: Österreichische Novellistik des 20. Jahrhunderts), Wilhelm Braumüller, Wien, 1966, S. 22.
  5. Walter H. Perl: Schnitzler, Hofmannsthal und Andrian in Jung-Wien, (in: Journal of the International Arthur Schnitzler Research Association, Vol. 5, No. 3, 1966), S. 22-26.
  6. Horst Schumacher: Leopold Andrian. Werk und Welt eines österreichischen Dichters, Bergland Verlag, Wien, 1967.
  7. Helmut A. Fiechtner: Hugo von Hofmannsthal/Leopold von Andrian: Briefwechsel, S. Fischer, (in: Literatur und Kritik, 28, 1968), S. 498f.
  8. Hugo von Hofmannsthal/Leopold von Andrian: Briefwechsel, S. Fischer Verlag, Frankfurt a. M., 1968.
  9. Walter H. Perl: Der Dichter Leopold Andrian: Frühvollendung und Verstummten, (in: Modern Austrian Literature, Vol. 2 No. 2, 1969), S. 23-29.
  10. Walter H. Perl (Hrsg.): Dokumente und Stimmen, (in: Leopold Andrian: Der Garten der Erkenntnis), S. Fischer, Frankfurt a. M., 1970, S. 65-98.
  11. Walter H. Perl: Leopold Andrian. Die Wiederentdeckung eines Dichters, (in: Weltwoche-Magazin, Nr. 27, 3. Juli, 1970), S. 13-15.
  12. Karl Johann Müller: Das Dekadenzproblem in der österreichischen Literatur um die Jahrhundertwende, dargelegt an Texten von Hermann Bahr, Richard von Schaukal, Hugo von Hofmannsthal und Leopold von Andrian, Akademischer Verlag Hans-Dieter Heinz, Stuttgart, 1977, S. 88-97.
  13. Jens Malte Fischer: Fin de Siècle. Kommentar zu einer Epoche, Winkler Verlag, München, 1978, S. 144-157.
  14. Julius Pap: Leopold Andrian „Der Garten der Erkenntnis“, (in: Die Wiener Moderne. Literatur, Kunst und Musik zwischen 1890 und 1910), Philipp Reclam, Stuttgart, 1981, S. 380ff.
  15. Jens Rieckmann: Narziss und Dionysos: Leopold von Andrians „Der Garten der Erkenntnis“, (in: Modern Austrian Literature, Vol. 16, No. 2, 1983), S. 64-81.
  16. Gottfried Stix: Leopold von Andrian und die Krise des Fin de Siècle, (in: Giuseppe Farese (Hrsg.): Akten des Internationalen Symposiums 'Arthur Schnitzler und seine Zeit'), Peter Lang, Bern, 1985, S. 284-291.
  17. Jens Rieckmann: Aufbruch in die Moderne. Die Anfänge des Jungen Wien. Österreichische Literatur und Kritik im Fin de Siècle, Athenäum, Frankfurt a.

- M., 1986, S. 136f.,142f.
18. Gotthart Wunberg: Österreichische Literatur und allgemeiner zeitgenössischer Monismus um die Jahrhundertwende, (in: Peter Berner / Emil Brix / Wolfgang Mantl(Hrsg.): Wien um 1900. Aufbruch in die Moderne), R. Oldenbourg Verlag, München, 1986, S. 108.
  19. Wendelin Schmidt-Dengler: Häresie und Tradition. Literatur, (in: Hannes Androsch / Helmut H. Haschek: Österreich. Geschichte und Gegenwart), Verlag Christian Brandstätter, Wien, 1987, S. 412.
  20. Ursula Renner: Leopold Andrian über Hugo von Hofmannsthal. Auszüge aus seinen Tagebüchern, (in: Hofmannsthal Blätter 35 / 36, 1987), S. 3-87.
  21. Bernhard Zeller (Hrsg.): Jugend in Wien. Literatur um 1900. Eine Ausstellung des Deutschen Literaturarchivs im Schiller-Nationalmuseum Marbach am Neckar, (Sonderausstellungen des Schiller-Nationalmuseums Katalog Nr. 24), Deutsche Schillergesellschaft, Marbach am Neckar, 1987, S. 154-163.
  22. Edwin Hartl: Die Korrespondenzpartner des Freiherrn Leopold von Andrian,(in : Die Presse, 23 / 24, Dezember 1989)
  23. Peter Ernst: Wiener Literaturgedenkstätten, Edition Wien Verlag, Wien, 1990, S. 10f.
  24. Harald Hartung: Narziß träumt. Hundert Jahre im „Garten der Erkenntnis“. (Frankfurter Allgemeine Zeitung, 29. Dezember, 1990)
  25. Manesse Verlag (Zürich): Presse- und Informationsabteilung, Leopold Andrian „Der Garten der Erkenntnis“. 1990.
  26. Iris Paetzke: Nachwort (in: Leopold Andrian: Der Garten der Erkenntnis) , Manesse Verlag, Zürich, 1990, S. 61-68.
  27. Jacques Le Rider: Das Ende der Illusion. Zur Kritik der Moderne, ÖBV Publikumsverlag, Wien, 1990, S. 94f.
  28. Gottfried W. Stix: Andrians Kreis,(in: Die Furche, 6, 8. Februar 1990)
  29. ヴェルナー・フォルケ 『ホーフマンスタール』 (横山滋訳), 理想社, 1971, 57-59頁。
  30. カール・E・ショースキー 『世紀末ウィーン。政治と文化』 (安井琢磨訳), 岩波書店, 1983年, 377-387頁。
  31. カール・クラウス 『とりこわされた文学』 (原研二訳), (池内紀 『ウィーン 聖なる春』, ドイツ世紀末第一巻), 国書刊行会, 1986, 78-79頁。
  32. ニーケ・ワーグナー 『世紀末ウィーンの世界と性』 (菊盛英夫訳), 筑摩書房, 1988年, 31-32頁。
  33. 飯吉光夫 『レオポルト・アンドリアンの『認識の園』にふれつつ』 (『プリスマ。川村二郎をめぐる変奏』), 小沢書店, 1991, 95-97頁。
- その他, 種々の文学史, 文学事典など。